

神戸市によるファッション都市事業開始後の 地域社会における神戸像

——社会科副読本に着目して

*Kobe's Image in the Local Society Due to the Local Government-Led Fashion City Project:
Using Supplementary Reading Materials for Social Studies*

宮崎友里 [立教大学観光学部・助教]

MIYAZAKI, Yuri

Abstract: This study aimed to determine the changes brought about by the Fashion City Project, initiated by the Kobe City administration in 1973, to the local society. Kobe City is the first local government in Japan to set up a “fashion city.” The paper intends to answer the following question: How has the local society perceived this local government-led project? To this end, the paper focused on examining the relationship between Kobe’s image in the local society and the Fashion City Project. The local educational materials related to Kobe City were analyzed in the study. From the findings of the analysis, it became clear that they began to show the image of Kobe, the birthplace of western clothes in Japan. In conclusion, the Kobe administration-led Fashion City Project has changed the image of Kobe for the local society.

Keywords: 神戸市 (Kobe City), ファッション都市 (Fashion city), 社会科副読本 (Supplementary reading materials for social studies), 地域像 (Regional image)

I はじめに：神戸市とファッション

II 背景：神戸市行政のファッション都市事業と
アイデンティティ方策

III 目的：地域社会はどのように変化したのか

1. 着眼点

2. 資料

3. 議論の流れ

IV ファッション都市事業開始後の地域社会

1. ファッション都市化する神戸市

2. 地域教育におけるファッション

V おわりに

1. 結果：「日本における洋服発祥の地」

2. 考察：神戸像と神戸市行政

3. 今後の課題

I——はじめに：神戸市とファッション

日本の地方自治体は、まちづくり事業や観光事業として、各地域に特異な歴史や資源を強調する

ような地域開発事業に取り組むことがある。地域開発に事業に行政主導で取り組んできた地方自治体の中でも、先進的自治体として知られるのが神戸市である。特に1970年代から1980年代にかけて、神戸市がいくつもの地域開発事業に取り組んだ様子は、「株式会社神戸市」と表現されたほどである。

その神戸市が、「神戸」という地名を冠した宣言を初めて行ったのが、神戸ファッション都市宣言であった。神戸ファッション都市事業は、開始から50年近くにわたり、現在にまで続く事業である。現在までに、「ファッション都市」を掲げた地方自治体は複数あるが、日本で初めて「ファッション都市」を掲げた地方自治体は神戸市であった。

その始まりは1972年に当時の神戸市長がファッション都市構想に言及したことに遡る。翌1973年には地方自治体として公式に「ファッション都市宣言」を行い、ファッション都市事業に予算を付けた。

以降、神戸市はファッションに関する行事の実施や施設の整備、また関連企業の誘致等を行った。こうした一連の事業群を結実させるものとして、1997年には「神戸ファッション美術館」を開設するに至る。この美術館は、ファッションをテーマに掲げたものとしては日本初のものである。¹

II——背景:神戸市行政のファッション都市事業とアイデンティティ方策

当時の神戸市が、洋服をことさらに強調するものとしてファッション都市事業を開始したのはなぜだったのか。その妥当性については、先行研究ですでに明らかにされている。当時の神戸市職員であった三好は、ファッション都市政策は産業政策というよりもむしろ、神戸市のアイデンティティ戦略であったと後に解説している(三好1989:139-140)。

そのアイデンティティの具体的な中身について、資料調査から明らかにしたのがMiyazakiである。Miyazakiは、神戸市議会議事録や神戸新聞の資料

を用いて、当時の神戸市内において、神戸は「新しい町」であるという地域像が共有されており、その地域像が「歴史の無さ」と関連付けて否定的に理解されていたことを示した。こうした心理的課題を解決するものとして着目されたのが「進取の気性」であった。すなわち、神戸は「新しい町」であるがゆえに、人々は「進取の気性」を有してきた、と議論されていたのである。この進取の気性を表しているものとして位置づけられたのが、外国由来である洋服、つまりファッションであった(Miyazaki 2021)。

以上から、神戸市が政策としてファッション都市を掲げた意図は、新しい町における進取の気性を示すためであった、と整理することが出来る。

III——目的:地域社会はどのように変化したのか

このようにして、神戸市はファッション都市事業を開始した。本事業は「新しい町」における「進取の気性」を強調する方策として、行政の意図に基づいて開始されたものであったが、それは地域社会ではどのように受け止められたのだろうか。

1. 着眼点

1973年のファッション都市宣言をもって、公式に開始されたファッション都市事業は、現在にまで続く長期事業である。実際に、50年近くにわたり、数多くの関連イベント等が実施されてきた。ゆえに、本事業の影響も長期にわたり観察する必要がある。本稿は、神戸市がファッション都市事業を開始した後、地域社会においてどのような変化があったのかを長期的に観察するものである。

2. 資料

本稿では、地域社会における認識を観察する手がかりとして、地域内で使用される教材を取り上

げる。小学生用と中学生用それぞれの社会科副読本において、ファッションがどのように教材化されてきたのか(あるいは教材化されてこなかったのか)を調査することで、地域社会におけるファッション都市事業が持つ意味を明らかにしていきたい。²

3. 議論の流れ

神戸市がファッション都市事業を開始した後、ファッションをめぐる地域社会のあり様はどのようなものであったのか。まず、先行研究に依拠しながら、ファッションをめぐる地域社会の状況が産業面においてどのような変化があったのかを確認する。続いて、社会科副読本を用いて、ファッションをめぐる地域社会の認識について検討を行う。

IV—ファッション都市事業開始後の地域社会

1. ファッション都市化する神戸市

1972年に神戸市長が「神戸ファッション都市づくり」を表明したことに始まった神戸市のファッション都市事業であるが、実際に神戸市においてファッション都市化はどのように進展したのだろうか。

神戸市の基幹産業であったのは重工業であった。重工業の中でも神戸市の重要産業として製造拠点を構えていたのは鉄鋼・造船業であった。神戸市内のファッション産業と重工業産業の出荷額と従

業員数の推移を比較してみよう。表1の通りである。

まず、出荷額から確認していこう。ファッション都市事業に関する施策が開始された1973年の翌1974年の時点において、ファッション産業の出荷額は3414億円であるが、その後は順調に出荷額を増加させており、1979年には4692億円、1985年には6150億円、1988年には6247億円、となっている。

全産業比に占めるファッション産業の出荷額の割合に関しても、1974年に18.9%であったが、1979年には22.1%、1985年には21.5%、1988年には22.7%と割合を高めている。

一方で、鉄鋼・造船業における出荷額はどのように推移しているだろうか。1974年には5279億円、1979年には4889億円、1985年には5925億円、1988年には4385億円、1989年には4765億円となっており、漸減あるいは出荷額にはほとんど変化が見られない。但し、出荷額の全産業比に占める割合は、1974年には29.2%であったものが、1979年には23.0%、1985年には20.7%、1988年には15.9%とその割合を低下させている。すなわち、鉄鋼・造船業それ自体の出荷額の漸減状態に比して、神戸市内の全産業においてはその経済規模が相対的に縮小していることが読み取れる。

続いて、従業員数を確認していこう。従業員数に関しては、製造設備の機械化等の影響が想定されるため、従業員数よりも全産業比における各産業の占める割合を注視したい。

まずファッション産業に関しては、従業員数について1974年が30351人、1979年が31913人、1985年が32852人、1988年が33876人、1989年が31722人であり、漸増していることが確認できる。それら各年の従業員数の全産業比に占める割合は、1974年が22.5%、1978年が26.8%、1985年が28.2%、1988年が30.7%、1989年が30.7%であり、1974年から1988年の15年間でその割合が8ポイント上がっていることが分かる。

表1 神戸市内のファッション産業と重工業産業の推移

区分	1974年	1979年	1985年	1988年	1989年
ファッション産業	出荷額 (18.9%)	4692 (22.1%)	6150 (21.5%)	6247 (22.7%)	6145 (21.9%)
	従業員数 (22.5%)	31913 (26.8%)	32852 (28.2%)	33876 (30.7%)	31722 (30.7%)
鉄鋼・造船業	出荷額 (29.2%)	4889 (23.0%)	5925 (20.7%)	4385 (15.9%)	4765 (16.3%)
	従業員数 (32.2%)	26009 (21.8%)	22568 (19.4%)	16148 (14.6%)	15696 (14.5%)

(単位: 億円, 人)

()は全産業比

出典: 高寄(1993:64)表5を筆者修正

一方で、鉄鋼・造船業に関しては、従業員数について1974年が43531人、1979年が26009人、1985年が22568人、1988年が16148人、1989年が15696人であり、その数を大きく減少させていることが確認できる。従業員数の減少割合は1974年から1979年の5年間でおよそ40%、1985年から1988年の3年間でおよそ30%にも上る。鉄鋼・造船業の従業員数の変遷は神戸市における全産業比においては、1974年が32.2%、1979年が21.8%、1985年が19.4%、1988年が14.6%、1989年が14.5%であり、15年間でその割合を半減させていることが分かる。

以上の数値は、ファッション産業の製造過程（製造業）における数値である。もっとも、ファッション産業は製造業のみならず、卸売業、小売業を含めた総合的な産業であることは指摘するまでもなく明らかであろう。確認してきた通り、ファッション産業は製造業として成長を遂げている。それに付随して、他の領域におけるファッション産業がどのように成長を遂げたのか、表2から確認していこう。

製造業としてのファッション産業がその規模を拡大するのに並行して、卸売業、小売業においてもファッション産業はそれぞれ規模を拡大していることが分かる。表2から明らかな通り、各々の割合は、小売業の商店数を除いたすべての項目において、増加を示している。製造業、卸売業、小売業において、特に変化が表れているのが製造業と卸売業である。それらにおいてファッション産業の比重が大きくなっているという点で、神戸市内のファッション産業が総合的に成長していることが読み取れる。

2. 地域教育におけるファッション

行政主導のファッション都市事業であったが、地域社会においても実際にファッション産業の規

表2 ファッション産業が占める比重の変遷

項目	1974年			1988年			
	全産業	ファッション産業	割合	全産業	ファッション産業	割合	
製造業	事業所数	5819	2223	38.2%	6973	2864	41.1%
	従業員数	135178	30351	22.5%	110508	33876	30.7%
	出荷額	1809984	341374	18.9%	2752541	624713	22.7%
卸売業	商店数	4227	664	15.7%	6114	1064	17.4%
	従業員数	49844	6517	13.1%	62349	13152	21.1%
	年間販売額	2253655	239742	10.6%	4986362	1062362	21.3%
小売業	商店数	18578	7492	40.3%	19711	7641	38.6%
	従業員数	70391	21632	30.7%	86857	27097	31.2%
	年間販売額	618666	143662	23.2%	15778646	399214	25.3%

(単位: 億円, 人)

()は全産業比

出典: 高寄(1993:59)表3を筆者修正

模が拡大していることを確認した。では、地域社会においてファッションはどのように理解されたのだろうか。

本稿では、地域教育の教材として用いられる社会科教育の副読本に着目し、神戸市におけるファッションの位置づけについて確認していきたい。

以下の表3は、神戸市立中央図書館ならびに神戸大学震災文庫に残されていた、社会科副読本について整理したものである。年代により所蔵状況が異なっており、1960年代に出版されたものを確認することには困難があった。しかしながら、表3から、1956年から2016年までの60年間における、神戸市のファッションについての提示内容の変遷を概略ながら捉えることができる。

なお、社会科副読本は小学生用と中学生用とが併存しており、以下の表ではそれらを同程度に重要なものとして扱っている。また、小学生用の副読本には「小学生用」あるいは「小学3年生用」と「小学4年生用」の分冊になっているものも含まれるが、それらも同程度に重要なものとして扱っている。

まず、小学生用の副読本において、ファッション都市宣言が出された直後の1977年副読本と1978

表3 社会科副読本におけるファッションの教材化

	小学生用	中学生用
1956年	ファッションについて記載なし	
1977年	ファッションについて記載なし	
1978年	ファッションについて記載なし	
1982年	(小3用)年表 大正12-13年頃「このころから洋服を着る男の人がふえた。」の一文あり	
1985年	(小3用)ファッションについて記載なし	ファッションについて記載なし
	(小4用)ファッションについて記載なし	
1995年	(小3用)ファッションについて記載なし	ファッションについて記載なし
	(小4用)ファッションについて記載なし	
1997年		「神戸市の産業」の地場産業としてファッションに言及(2ページ分)
1999年		「神戸市の産業」の地場産業としてファッションに言及(2ページ分)
2000年		「神戸市の産業」の地場産業としてファッションに言及(2ページ分)
2001年	(小3用)ファッションについて記載なし	「神戸市の産業」の地場産業としてファッションに言及(2ページ分)
	(小4用)ファッションについて記載なし	
2002年	「神戸はじめ物語&日本一物語」の一例として「洋服」に言及	
2011年	「すてきな神戸！神戸はじめ物語」の一例として「洋服」に言及	ファッションについて記載なし
2014年	「すてきな神戸！神戸はじめ物語」の一例として「洋服」に言及	
2016年	「すてきな神戸！神戸はじめ物語」の一例として「洋服」に言及	

出典：筆者作成

年副読本においては、ファッションについて全く記載されていない。その後の1982年副読本には神戸市の年表において、大正12～13年頃に「このころから洋服を着る男の人がふえた」という一文が記載されている。確認できる限り、これが初めての洋服に関する記載である。

これら資料において「ファッション」という単語についての記載が初めて確認されるのが1997年に刊行された中学生用の副読本であった。本書の構成は、以下の通りである。第1章「地図の学習」、第2章「身近な地域の調べ方」、第3章「神戸市のあらし」、第4章「課題学習に取り組もう」の、全50ページから成る。この中で、第3章「神戸市のあらし」は、「①神戸市の自然環境」、「②神戸市の発

展」、「③神戸市の産業」、「④神戸港の役割と他地域との結びつき」、「⑤これからの神戸市」の項目から成る。これらのうち、「③神戸市の産業」においてファッションに関する記述がなされている(神戸市立中学校教育研究会社会科研究部1997:36-37)。

そこでは、神戸市のファッション都市宣言が神戸市の地場産業と関連させる形で説明されている。「③神戸市の産業」の全体的テーマとして、「神戸の地場産業と「ファッション都市宣言」と題する見出しが付けられている。そこでの内容は以下の通りである。

1868年の神戸港開港以来、神戸は国際港

湾都市として発展してきました。

開港とともに開設された外国人居留地を通じてもたらされた、様々な洋風の生活文化に刺激を受け、神戸には洋服、アパレル、くつ、洋菓子、洋家具、クリスマス用品などの産業が生まれ育ちました。

また、国際貿易港の機能を生かして、原材料の輸入や製品の輸出に有利なことから、ケミカルシューズやコーヒー、真珠加工などの産業も生まれました。〔中略〕

そこで、神戸市は1973(昭和48)年に、全国に先がけて「ファッション都市宣言」を行い、地場産業育成、発展に力を注いでいます。

(神戸市立中学校教育研究会社会科研究部 1997:36)

とある。すなわち、神戸市にはファッション関連の地場産業が発展していた土壌があったために、神戸市は1973年にファッション都市宣言を行ったのだ、と説明されている。

「③神戸市の産業」において、神戸市の地場産業の例示として「アパレル産業」、「酒造業」、「真珠加工」が挙げられており、それぞれが独立した項目となっている。「アパレル産業」の項目には、何が書かれているのだろうか。確認してみよう。

神戸市のアパレル産業は、婦人服を中心に洗練されたファッションセンスをもとに、「ファッション都市宣言」以降、急成長した産業です。現在、ポートアイランドのファッションタウンや六甲アイランドのファッションマートなどを拠点に発展しています。

(神戸市立中学校教育研究会社会科研究部 1997:37)

ここでは、神戸市のアパレル産業とは、1973年のファッション都市宣言以降、すなわち、神戸

市がファッション都市事業に取り組み始めて以降に急速に成長した産業であると説明されている。

この説明と、先ほどの「地場産業」であるとする説明とを考え合わせると、洋服に関する神戸市の公式見解は明らかとなる。すなわち、「神戸には開港の歴史以来、洋服文化の土壌があったことを受けて、1973年に神戸市はファッション都市宣言を行ったが、それにより神戸市のアパレル産業は発展を遂げた」、となる。

続いて、1999年、2000年、2001年にも中学生用の副読本にてファッションについて2ページ分の紙幅が割かれている。内容の概要は類似しているが、使用されている一部の写真の位置が入れ替わっていたり、地場産業として例示された「アパレル産業」の項目が「ケミカルシューズ製造」に変更されていたりする(神戸市立中学校教育研究会社会科研究部1999:36-37, 2000:36-37, 2001:36-37)。

その後2002年には小学生用の副読本において、年表の下段に「神戸はじめ物語&日本一物語」と題された項目が掲載される。そこでは、

明治のはじめに神戸の港が外国に開かれたことで、「日本で初めて」のものが生まれたり、全国に広がったりしました。たとえば、次のようなものです。

マッチ・ゴム・ラムネ・コーヒー・紅茶・ソース・パーマメント器・パン・ケーキ・チョコレート・ソース・シューズ・ぶたまん・洋服・洋菓子・ゴルフ・マラソン・ボクシング・サッカー・ボート・映画(活動写真)・水族館・ジャズ・シャンソンなど

(神戸市教育委員会2002:年表)

と記されている。すなわち、神戸市の社会科副読本において、洋服は神戸から「全国に広まった」「日本で初めて」のものとして位置づけられている

ことが分かる。

同内容のものが、より大きな紙面で掲載され始めることが確認できるのが2011年の小学生用の副読本である。ここでは、2002年版の「神戸はじめ物語&日本一物語」と趣旨を同じとする項目を「すてきな神戸！」と題して4ページ分もの紙幅が割かれている。「神戸はじめ物語」に2ページ分、「神戸ナンバーワン物語」に半ページ分、加えて「神戸めずらしいもの物語」に4分の1ページ、「神戸三大〇〇物語」に4分の1ページ、である。更には、「人気の町・神戸」と題された1頁が続く。ここでの「神戸はじめ物語」の中で、「日本では「神戸がはじめて」のものや、「神戸から日本中に広まった」というもの」があると説明し、その一例として、洋服が挙げられている(神戸市小学校教育研究会・社会科部2011:157-160)。

以降、2014年副読本ならびに2016年副読本においても同一の内容が掲載されている。

以上、1956年から2016年までの60年間における、神戸市の地域教育教材である社会科副読本においてファッションはどのように説明されてきたのかについて変遷の概略を確認してきた。1972年から神戸ファッション都市化の動向が見られていた神戸市だが、それに先行する1956年副読本や、動向が見られた直後の1970年代の副読本においては、ファッションに関する記述は確認されなかった。洋服への言及が確認されるのが1982年副読本の年表への書き込みであった。その後1997年副読本ではファッション都市事業の重要性が説明された。また2002年以降の副読本においては、神戸から日本に広まったものとして洋服が位置づけられるようになった。

すなわち、神戸市の地域教育教材において、ファッションは「日本において神戸が初めて」の地であり、「神戸から全国に広まった」ものとして提示されてきた。全国の他地域に先駆けて神戸において普及したことを繰り返し強調する内容であっ

た。

以上から、神戸市内において洋服とは、日本社会の洋服文化を牽引する神戸像を連想させるものとして提示されていることが明らかとなった。

V——おわりに

1. 結果 : 「日本における洋服発祥の地」

本稿は、1973年のファッション都市宣言を契機として、ファッション都市事業が行政主導で開始された後、地域社会が実際にどのような変化を遂げたのかを観察するものである。先行研究の整理を参照しながら、神戸市内のファッション産業は、製造業、卸売業、小売業において、実際に規模を拡大させていることを確認した。

続いて、神戸市内におけるファッションに対する認識がどのようなものであるのかを明らかにするため、神戸市の地域教育に着目し、社会科副読本を対象とした調査を行った。その結果、1995年までファッションに関する言及がなされていないこと、ならびに、1997年にファッションが地場産業と関連付けて説明され始めたことが明らかになった。また、2002年には日本において洋服は神戸が発祥の地であるという位置づけが示され始めたことが明らかになった。

2. 考察 : 神戸像と神戸市行政

資料調査で明らかにした通り、神戸市の地域教育教材である社会科副読本においてファッションへの言及が観察されるようになり、その内容は、神戸は日本におけるファッション発祥の地であるというものであった。別稿のMiyazaki(2021)が明らかにしている通り、神戸市のファッション都市事業とは、「新しい町」における「進取の気性」を示すための方策であった。この事実を考え合わせるならば、地域社会において描かれる地域像が、

行政の意図に基づいた政策内容に方向づけられたことが示唆される。

3. 今後の課題

もっとも、神戸市がファッションに関する地域開発事業に取り組んだのは、日本における洋服の発展をめぐる、神戸が歴史的に重要であったと

いう事実があったからに他ならない。

しかしながら、全ての地方自治体が、そのような特異な歴史や資源に恵まれているわけではない。そうした地方自治体は、観光やまちづくりといった地域開発を行う際に、一体どのような工夫を凝らしているのだろうか。今後の課題として、残したい。

注

- 1 英語の fashion は、流行や仕様を意味する用語であるが、日本語でカタカナ表記する際のファッションとは特に洋服に関する流行や仕様を意味して使用される用語である。実際に、神戸ファッション美術館(概要はホームページ参照 <https://www.fashionmuseum.or.jp/>)も、展示の中心となっているのは洋服に関するものである。
- 2 地方自治体の動向に先行して、地域社会の認識の変化を指摘した先行研究として、宮崎(2018)がある。宮崎は、水俣市が教育旅行を誘致し始めたことに先行して、社会科副読本において水俣病の教材化が始まっていたことを明らかにした(宮崎2018)。

文献

- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(1977)『わたしたちの神戸市』大和出版印刷K K.
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(1978)『わたしたちの神戸市』大和出版印刷K K.
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(1982)『わたしたちの神戸市』神戸市健康教育公社文化事業部。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(1985)『わたしたちの神戸市(3年)』神戸市健康教育公社。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(1985)『わたしたちの神戸市4年』神戸市健康教育公社。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(1995)『わたしたちのまち神戸3年』神戸スポーツ教育公社。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(1995)『わたしたちの神戸市4年』神戸市スポーツ教育公社。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(2001)『わたしたちのまち神戸3年』神戸市体育協会。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(2001)『わたしたちの神戸市4年』神戸市体育協会。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(2002)『わたしたちの神戸3・4年』神戸市体育協会。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(2011)『わたしたちの神戸3・4年』神戸市教育委員会。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(2014)『わたしたちの神戸3・4年』神戸市教育委員会。
- ✧神戸市小学校教育研究会社会科部(編)(2016)『わたしたちの神戸3・4年』神戸市教育委員会。
- ✧神戸市小学校研修部(編)(1956)『わたしたちの神戸』立川文明堂。
- ✧神戸市立中学校教育研究会社会科研究部(1985)『私たちの神戸』神戸市健康教育公社。
- ✧神戸市立中学校教育研究会社会科研究部(1995)『私たちの神戸』神戸市スポーツ教育公社。
- ✧神戸市立中学校教育研究会社会科研究部(1997)『私たちの神戸』神戸市スポーツ教育公社。
- ✧神戸市立中学校教育研究会社会科研究部(1999)『私たちの神戸』神戸市体育協会。
- ✧神戸市立中学校教育研究会社会科研究部(2000)『私たちの神戸』神戸市体育協会。
- ✧神戸市立中学校教育研究会社会科研究部(2001)『私たちの神戸』神戸市体育協会。
- ✧神戸市立中学校教育研究会社会科研究部(2011)『私たちの神戸』神戸市教育委員会事務局指導部指導課。
- ✧高寄昇三(1993)「神戸ファッションシティの形成」森野美徳編『地域の活力と魅力』ぎょうせい、54 - 74頁。
- ✧宮崎友里(2018)「水俣市における教育旅行：水俣病への説明変化に着目して」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』、9 - 12頁。
- ✧三好正英(1989)「神戸市のファッション都市化政策」神戸都市問題研究所(編)『ファッション都市の理論と実践』勁草書房、139 - 157頁。
- ✧Miyazaki, Yuri (2021): Transformation of an Industrial City into a Fashion City: Development Policy and City Identity, *Ryukoku Journal of Peace and Sustainability*, vol.1, pp.1-12.

